



留学レポート

欧州短期留学を通じて得た胆膵内視鏡診療と国際交流の経験 — Evangelisches Krankenhaus Düsseldorf 短期留学報告 —

東京医科大学 消化器内科学分野 向井俊太郎

日本消化器内視鏡学会欧州留学支援制度の助成を賜り、2025年10月の1カ月間、ドイツ・デュッセルドルフにある Evangelisches Krankenhaus Düsseldorf (EVK) (写真1)にて短期留学を行いました。このような貴重な機会を与えていただきました日本消化器内視鏡学会国際委員会担当理事の山本博徳先生(自治医科大学)、委員長の斎藤豊先生(国立がん研究センター中央病院)をはじめとする委員の先生方、ならびに事務局の皆様へ深く感謝申し上げます。また、本留学に際して温かく送り出してくださった糸井隆夫教授をはじめ、東京医科大学消化器内科の諸先生方にも心より御礼申し上げます。本稿では、デュッセルドルフでの研修前に参加した UEGW2025 (ベルリン)を含め、ドイツ滞在中に得た経験についてご報告いたします。

UEGW2025は2025年10月4日から7日にかけてベルリンで開催され、私自身初めての参加となりました。米国 DDW と並ぶ世界最大規模の消化器病学会であり、世界各国から1万人以上の研究者・臨床医が集い、活発な議論が行われていました。日本からも同世代の先生方が多数参加され、質の高い研究成果を発表されており、大変刺激を受けました。学会公式の懇親イベントである「UEG Night」では、欧州らしい華やかな雰囲気の中で国境を越えた交流が行われ、日本人医師同士のみならず海外の研究者・臨床医との交流を深める貴重な機会となりました(写真2)。

UEGW 終了後、ベルリンからデュッセルドルフへ移動し、EVKでの研修を開始しました。EVKは大学病院ではなく一般総合病院ですが、内視鏡分野では前任の Prof. Neuhaus が世界的に著名な内視鏡医のため、大規模な内視鏡ライブやワークショップも開催されており、欧州における先進的内視鏡診療を担う重要な拠点の一つです(写真3)。現在の消化器内科教授は Prof. Torsten Beyna であり、胆膵内視鏡診療の実働を担っていたのは内視鏡部門 (Endoskopie) の責任者である Dr. Thom-



写真1 Evangelisches Krankenhaus Düsseldorfの外観。



写真2 「UEG Night」(UEGW2025, ベルリン)において、田尻久雄前理事長を含む日本人医師との交流。

as Veiser です(写真4)。EVKでは5室の内視鏡室が稼働しており、毎日朝から夕方にかけて上下部内視鏡検査・治療、超音波内視鏡検査 (EUS)、内視鏡的逆行性胆管膵管造影 (ERCP)、interventional EUSが行われていました。母国語がドイツ



写真3 EVKの内視鏡室.



写真4 EVK内視鏡部門 (Endoskopie) 責任者である Dr. Thomas Veiser と筆者.

語であるため、スタッフ間の会話は理解できなかったのですが、多くの内視鏡医や一部の看護師は英語にも堪能であり、私に対しては英語で丁寧な説明やディスカッションをしてくれました。

特に印象的であったのは、内視鏡室運営の効率性です。EVKでは内視鏡医1名とスタッフ2名という最少人数でERCPが行われており、術者がスコープ操作、胆道鏡操作、透視操作までを一手に担っていました。それにもかかわらず、準備から検査・治療、片付け、患者搬送に至るまでの一連の流れは非常に洗練されており、患者の入れ替えも極めてスムーズでした。限られた人員で最大の成果を上げる内視鏡室運営は、働き方改革が進む本邦においても大いに参考になると感じました。

ERCPおよびEUS関連手技の基本的な内容は本邦と大きな違いはありませんでしたが、デバイス選択や治療戦略には欧州ならではの考え方が随所にみられ、興味深いものでした。各症例終了後には必ず何らかのディスカッションを積極的に行い、英語で自分の考えを述べる良い訓練にもなりました。本邦ではまだ一般的ではない手技として、術後再建腸管例の良性胆道疾患に対するEUS-Directed TransGastric ERCP (EDGE)を実際に見学する機会を得ました。EVKでは20~25例の



写真5 1838年創業の老舗レストラン「シューマッハー・アルト」での懇親会 (筆者の右: Prof. Torsten Beyna).

経験があり、非常に有用とのことで、将来的に本邦でも導入が検討される手技であると感じました。一方で、胆管挿管をはじめとする胆膵内視鏡の繊細な基本手技やトラブルシューティング能力に関しては、日本人胆膵内視鏡医の技術力の高さを改めて実感しました。

UEGWを含む今回の留学を通じて、国際舞台における英語でのコミュニケーション能力の重要性を強く認識しました。翻訳ツールの進歩により言語の壁は低くなりつつありますが、その場で自分

の考えを即座に伝え、相手の意図を正確に理解する力は依然として大きな課題です。英語でのコミュニケーションは、日本人にとって最後に克服すべき“壁”であり、今後さらに国際化が進む消化器内視鏡分野において避けて通れない課題であると感じました。

滞在中には、ドイツビールとドイツ料理を楽しむ老舗レストランに連れて行っていただいたほか、休日には世界遺産であるケルン大聖堂を訪れ

るなど、ドイツの文化や歴史にも触れることができました(写真5)。これらの経験も含め、本留学は臨床・研究の両面のみならず、自身の視野を大きく広げる貴重な機会となりました。今回の経験を糧として、今後も内視鏡医学の研鑽を積み、日本の消化器内視鏡学の発展に少しでも貢献できるよう努めていきたいと考えています。

論文受理 2025年12月24日